

## 諜報の世界と情報の宇宙 — 2013 年末クリスマス・イヴの恩赦から —

伊藤 英一\*

2013 年のクリスマス・イヴ、情報とメディアの歴史にささやかながらも一つの光明がもたらされると同時に、その深みの奥にある影の世界を考え直させる恩赦にかかわるニュースが、相次いで流れた。

コンピュータ創生の礎石を据え、今日のデジタル情報の宇宙を築くための道を切り開いたアラン・チューリング博士 (Alan Turing) に対し、エリザベス II 世女王陛下の命による恩赦が 2013 年 (治政 62 年) 12 月 24 日付で与えられた旨、公表された<sup>(1)</sup>、とのニュースもその一つである。

アラン・チューリング博士は、1952 年にホモセクシュアリティにかかわる有罪判決を受けており、今般の恩赦はこの罪に対するものである。今更ながらの感がしないでもなく、またホモセクシュアリティが法的処罰の対象から外された 1967 年以前に同様の有罪判決を受けた 5 万人にものぼるとされる人々との不平等が問題になりかねない措置とも考えられなくもない。

今回の恩赦は、彼の没後 60 年近く、生誕 102 年余という時点で与えられたことになる。有罪判決を受けた後、アラン・チューリング博士は保護観察下におかれ、化学的療法と称する処方を受けさせられていた。しかし、この判決があった 2 年後の 1954 年に、彼は自殺、ないしは身近な人々の一部によれば事故、あるいは一部の報道によれば保安当局筋の謀殺<sup>(2)</sup>、により 41 歳で命を終えている。彼の母親は、幼少時から天才の片鱗を見せ、ケンブリッジからプリンストン高等研究所等で研鑽を積んだ息子のアランが、第 2 次世界大戦中から戦後にかけて、どのような仕事をしていたのかを知らされないまま、彼の死を見届けなければならなかった。チューリング博士は、英国政府暗号学校 (Government Code and Cypher School) におけるドイツ海軍のエニグマ暗号を解読するための技法や装置の開発で中心的役割を果たし、英国情報局秘密情報部無線通信保安業務担当 (後の Her Majesty's Government Communications Centre: HMGCC) として音声信号の秘匿暗号化を試みる等、輝かしい成果を挙げたにもかかわらず、そんな業績が、戦後も長く機密扱いをされてきた事項に属するものとして隠されてきたからである。「若し」という仮定での話ではあるが、プリンストン高等研究所での同僚だったフォン・ノイマンの奨めに従って、そのまま彼が米国に留まり<sup>(4)</sup>、帰英していなかったら、彼だけではなく、世界の運命も大きく変わっていたとも考えられる。母親の寂しさはつり、エニグマ暗号の活躍によるドイツ海軍の優勢が続く一方で、チューリング博士はもっと長期にわたってデジタル技術の興隆を支え、情報メディアを巡る歴史を更にダイナミックなものにしてくれたのかも知れない。

ここで、チューリング博士恩赦に関する報道の一部を覗いてみよう。

2013 年 12 月 24 日午前 0 時に、BBC 放送は<sup>(5)</sup>、Royal pardon for codebreaker Alan Turing と

---

\*いとう えいいち 日本大学法学部新聞学科 教授

題し、彼の生誕百周年が2012年6月であったことを The centenary of Turing's birth was marked in June 2012 と触れた後、Computer pioneer and codebreaker Alan Turing has been given a posthumous royal pardon. It overturns his 1952 conviction for homosexuality for which he was punished by being chemically castrated. The conviction meant he lost his security clearance and had to stop the code-cracking work that proved critical to the Allies in World War II. と紹介している。

この恩赦を進言したグレイリング (Chris Grayling) 法相の言を伝える部分では、チューリング博士の貢献を称えつつ、彼がかかわったエニグマ暗号解読についての情報公開は2012年4月を待たなければならなかったことも含め、次のように触れられている。

“Dr Alan Turing was an exceptional man with a brilliant mind,” said Mr Grayling.

He said the research Turing carried out during the war at Bletchley Park undoubtedly shortened the conflict and saved thousands of lives.

Turing's work helped accelerate Allied efforts to read German Naval messages enciphered with the Enigma machine. He also contributed some more fundamental work on codebreaking that was only released to public scrutiny in April 2012.

“His later life was overshadowed by his conviction for homosexual activity, a sentence we would now consider unjust and discriminatory and which has now been repealed,” said Mr Grayling.

フランスのル・モンド紙 (Le Monde) は、2013年12月27日付<sup>(6)</sup> (ウェブ版は26日付<sup>(7)</sup>) の3面で、マルク・ロッシュ (Marc Roche) 特派員の手になる La grâce d'Alan Turing, héros de la guerre et gay persécuté (大戦の英雄であり、迫害されたゲイであるアラン・チューリングに恩赦) との見出し記事で、アラン・チューリング博士に恩赦が与えられた旨を伝えた。ドイツ海軍の暗号を破り、大西洋戦争を連合軍の勝利に導いた第二次世界大戦の英雄である数学者アラン・チューリング博士への恩赦は、遅きに失したとはいえ、思い切ってとられた勇気ある措置と称賛し、次のように報じている。

Avec la grâce royale posthume accordée au mathématicien Alan Turing (1912-1954), héros de la seconde guerre mondiale condamné en 1952 pour homosexualité, le gouvernement britannique fait tardivement repentance, mais du moins le fait-il nettement et courageusement. Cinquante-neuf ans, c'est une bien longue attente pour que soit réparée une injustice à l'encontre de celui qui, en cassant les codes des sous-marins allemands, avait permis aux Alliés de gagner la bataille de l'Atlantique.

2013年12月24日付のザ・ガーディアン紙 (The Guardian)<sup>(8)</sup> は、キャロライン・デヴィース (Caroline Davies) 記者による、Enigma codebreaker Alan Turing receives royal pardon との見出しで、Mathematician lost his job and was given experimental 'chemical castration' after being convicted for homosexual activity in 1952 との副題を添えた記事を掲載した。

この記事では、エニグマ暗号解読の成功で少なくとも2年は大戦を短期化させる程の役割を果たし、コンピュータの父とも見做されるチューリング博士の実績を、次のように記している。

The brilliant mathematician, who played a major role in breaking the Enigma code -

which arguably shortened the war by at least two years – has been granted a pardon under the Royal Prerogative of Mercy by the Queen, following a request from the justice secretary, Chris Grayling.

Turing was considered to be the father of modern computer science and was most famous for his work in helping to create the “bombe” that cracked messages enciphered with the German Enigma machines. He was convicted of gross indecency in 1952 after admitting a sexual relationship with a man.

しかし、同記事はチューリング博士の事績への評価に高いものがあることについては異論はないものの、今回の発表そのものについては多様な反応（There was mixed reaction to the announcement）が見受けられるとしている。特に、冷戦下の機密情報を取り巻く環境条件の再検証、公序良俗に関する法的環境等再考を迫る考え等も紹介されている<sup>(9)</sup>。

それらの中で、アンドリュー・ホッジス（Andrew Hodges）博士の意見として、恩赦よりも、本質的に必要な措置は冷戦下におけるチューリング博士が英国政府通信本部（Government Communications Headquarters; GCHQ）においてかかわった秘密任務についてのファイル開示であると記している。また、チューリング博士にとって最後の2年間における、秘密情報取扱資格の剥奪、国の不信と監視が致命的な要因であった可能性がある、次のように綴られている。

“Alan Turing suffered appalling treatment 60 years ago and there has been a very well intended and deeply felt campaign to remedy it in some way. Unfortunately, I cannot feel that such a ‘pardon’ embodies any good legal principle. If anything, it suggests that a sufficiently valuable individual should be above the law which applies to everyone else. (…)” A more substantial action would be the release of files on Turing’s secret work for GCHQ in the cold war. Loss of security clearance, state distrust and surveillance may have been crucial factors in the two years leading up to his death in 1954.”<sup>(10)</sup>

ところで、クリスマスを目前に控えた時期、モスクワからのニュースとして、ロシアの企業家ミハイル・ホドルコフスキー（Mikhail Khodorkovski）氏<sup>(11)</sup>に対し、プーチン大統領から恩赦が与えられたとのニュースが伝えられた。フランスのル・モンド紙の場合は、12月24日付の1面に見出しと、ホドルコフスキー氏が空路を経て釈放された先のベルリンで記者団に囲まれる写真を掲載、2面と21面の全頁にわたって同氏の恩赦関連記事で埋めている<sup>(12)</sup>。

また、同じモスクワ電として、2013年12月24日付のワシントン・ポスト紙（The Washington Post）には、バートン・ゲルマン（Barton Gellman）元記者の手になるエドワード・スノーデン（Edward Snowden）氏<sup>(13)</sup>に関する記事が掲載された。これはインタビューの報告と謳っているものの、2万5千字になんなんとする記事の大半がスノーデン氏からの情報提供から7ヶ月を経た今日までの総括とその成果を称揚することを内容としている。昨春からのこの件を、いったん落着かせて手仕舞いをするための世論形成と、米国大統領をはじめとする当局との恩赦ないしは司法取引を暗に志向していることを行間に滲ませている点が注目されるものであった。

米国国家安全保障局（National Security Agency; NSA）の情報収集活動について、NSAの受託事業者としてのブーズ・アレン・ハミルトン社（Booz Allen Hamilton Inc.）に雇用されていたスノーデン氏が、昨春から、ゲルマン元記者を含む3人のジャーナリストを介して、機密情報を公

衆に提示してきた任務は達成されたとする、“Edward Snowden, after months of NSA revelations, says his mission’s accomplished” との見出しになる記事である。

スノーデン氏は、情報暴露に伴う個人的なリスクを覚悟した上で、ブーズ・アレン・ハミルトン社に雇用されていた時点から抱いていた疑念を払拭するために情報を提供したのであり、人々がどのように管理されているかについて一言申すことができるようにしたかっただけ (“All I wanted was for the public to be able to have a say in how they are governed.”) と述べている。

これらのスノーデン氏の言葉に続く内容は、バートン・ゲルマン元記者の筆による総括的な解説記事となっている。

ここでは、次のような動機と背景の説明から説き起こされている。

エンジニアであるスノーデン氏は、問題解決アプローチをとっている。そんな彼は、危険な大衆監視装置がチェックもないまま増殖している (a dangerous machine of mass surveillance was growing unchecked) と考えたものの、機密区分がパブリックな議論を妨げて (Classification rules erected walls to prevent public debate) いるのが現状である、と危惧し憂慮した。NSAのビジネスは情報支配志向 (The NSA’s business is “information dominance,” the use of other people’s secrets to shape events) であり、そこからもたらされる問題等を考える機会を設けることが公民としての責務 (public duty) であるとの信条から、情報を人々に提供したのだ。

スノーデン氏は、確かに機密情報守秘義務合意書 (classified-information nondisclosure agreement) に署名をしているが、それはあくまでも民間契約 (a civil contract) であり、同氏の信義の誓約は他のところにある (He signed it, but he pledged his fealty elsewhere)。「忠誠宣言は秘密への宣言ではなく、合衆国憲法への忠誠宣言である。 (“The oath of allegiance is not an oath of secrecy. That is an oath to the Constitution.”)

このような説明に続いて、米国をはじめ諸外国の反応や、米国での判例やレポートの纏めをおこなっている。

このクリスマス・イヴのワシントン・ポスト記事を受ける形で、2014年年初に、ガーディアン紙の社説が掲げられた。2014年1月1日付のガーディアン紙は、スノーデン氏は恩赦に値すると主張し、“Snowden affair: the case for a pardon”<sup>(14)</sup>と題する社説を掲載した。同氏がその身に降りかかるであろう結果を覚悟した上で、ジャーナリストに機密情報を提供したのは勇氣ある行動であるとして、“Snowden gave classified information to journalists, even though he knew the likely consequences. That was an act of courage” との小見出しを付けている。

そこで先ず、スノーデン氏は、実効的で信頼できる民主的な管理の下にない現在の情報収集のあり方についての必要な知識と、十分な情報に基づいた論議の機会を、ジャーナリストを介することにより、人々に提供したのだ (Mr Snowden – through journalists, in the absence of meaningful, reliable democratic oversight – had given people enough knowledge about the nature of modern intelligence-gathering to allow an informed debate.) と、喚起した。

そして、スノーデン氏が尊厳を持って米国に帰国できるとともに、告発者と言論の自由の価値について、素晴らしい先例ともなるような扱いを大統領がされることを期待するとして、次のように、その社説を結んでいる。

We hope that calm heads within the present administration are working on a strategy

to allow Mr Snowden to return to the US with dignity, and the president to use his executive powers to treat him humanely and in a manner that would be a shining example about the value of whistleblowers and of free speech itself.

ニューヨーク・タイムズ紙も、同じく2014年1月1日付（ニューヨーク印刷版は2日付）で、「告発者エドワード・スノーデン（Edward Snowden, Whistle-Blower）」と題する社説を掲載した。<sup>(15)</sup>

米国はおろか地球上の何百万もの人々が、電話、電子メール等の情報をNSAに掌握されていたこと知ってから7ヶ月、連邦判事の二人までがNSAの情報収集について憲法に抵触するおそれがあるとの判断を示すまでに到り云々と、次のように説き起こしている。

Seven months ago, the world began to learn the vast scope of the National Security Agency's reach into the lives of hundreds of millions of people in the United States and around the globe, as it collects information about their phone calls, their email messages, their friends and contacts, how they spend their days and where they spend their nights. The public learned in great detail how the agency has exceeded its mandate and abused its authority, prompting outrage at kitchen tables and at the desks of Congress, which may finally begin to limit these practices.

The revelations have already prompted two federal judges to accuse the N.S.A. of violating the Constitution (although a third, unfortunately, found the dragnet surveillance to be legal). A panel appointed by President Obama issued a powerful indictment of the agency's invasions of privacy and called for a major overhaul of its operations.

NSAの情報収集活動にかかわる機密情報を、ジャーナリストの手に渡したスノーデン氏ではあることは確かであるが、そんな彼の告発は多大な貢献をしていると論じている。

加えて、スノーデン氏は米国の諜報活動の運用に深いダメージを与えたのかも知れないが、その暴露が国家の安全を脅かしたりしたような証拠はいささかも挙がっていない（Mr. Snowden has done profound damage to intelligence operations of the United States, but none has presented the slightest proof that his disclosures really hurt the nation's security）旨、指摘している。

この社説の最後は、スノーデン氏に帰郷を促すようなインセンティブ（an incentive to return home）を与えることをオバマ大統領に検討依頼することで結ばれている。

ニューヨーク・タイムズ紙の主張は、英国のガーディアン紙のように明確に恩赦を求める表現をとってはいない。これはニューヨーク・タイムズ紙が米国という当該国の地方紙であり、ガーディアン紙やワシントン・ポスト紙のようにスノーデン氏と直接的にはかかわっていないものの、二次的とは言え、多少なりとも利害関係者として言えなくもないという立場を勘案したからであろう。<sup>(16)</sup>

このニューヨーク・タイムズ紙の社説に呼応する形で、2014年1月19日付のル・モンド紙は、その1面中段で、「米国—スノーデン氏に恩赦か？（ÉTATS-UNIS: PARDONNER À SNOWDEN?）」と、大文字のみを使っての観測気球の見出しを掲げ、スノーデン氏への信頼性が高まっていると伝えた後、政治責任者や米国民は同氏に対して以前より厳しくなくなって来ており、ニューヨーク・タイムズ紙はスノーデン氏が「多大な貢献」をしたと報じたことを“(Snowden) gagne en crédibilité. Les responsables politiques et les Américains sont moins sévères à son égard. Le New York Times affirme même qu'il a rendu au pays “un grand service” と、伝えている。その記事と連続

するように、同じく1面下段に掲載した社説では、「もう少し努力を、オバマさん (Encore un effort, monsieur Obama)<sup>(18)</sup>」と、同紙にしては珍しい口調で、オバマ大統領への期待を表明、次いで2面全頁と3面を費やしてオバマ大統領のNSA改善案を紹介した。

ここまでに見たとおり、2013年末のクリスマス・イヴから2014年の年初にかけて、チューリング博士の恩赦を巡るニュースや、スノーデン氏への寛大な措置をと願う記事が相次いだ。いずれのケースも、情報がかかわる問題の難しさを深く感じさせるものである。

チューリング博士の第2次世界大戦中や戦後の事績は長く機密のベールに覆われたままで、情報にかかわる功績の中でも諜報的な、あるいは軍事的な色彩が強ければ強い程、報われることが少ないことが推察される。しかし、それでもなお、博士の場合のように無私の献身が公儀のために捧げられてきた姿は感動的ですからある。そんな博士の名誉回復が、没後数十年の年月を要し、それも恩赦という形でしか実現できなかったことは、ある意味で、往事の情報の世界が国際的世界の国境の壁に囲まれていたことを窺わせる。ル・モンド紙がチューリング博士への恩赦を「思い切ってとられた勇氣ある (nettement et courageusement)」ものと高く評価しているところは、その端的な例として挙げられる。マルク・ロッシュ (Marc Roche) ロンドン特派員も、この恩赦実施に当たっては、きっぱりと切り捨てて (nettement) 終止符を打たざるを得ない部分も多かったと了解しているからであろう。

一方、スノーデン氏への寛大な措置をと願う一連の記事について見てみよう。同氏を絞首刑<sup>(19)</sup>にせよといった厳しい意見もあるのは確かである。しかし、機密漏洩に伴うニュースとしてのインパクトは大きく、大衆監視のあり方についての見直しについては積極的かつ建設的な方向で好影響を与えている<sup>(20)</sup>。それにもかかわらず、NSAの情報収集システムそのものや、一国の安全保障が損傷を受けるような情報までは流失していない。また、大規模かつ広範囲にわたる大衆監視の問題は提起されながらも、個々の人々が傷つくようなプライバシーにかかわる部分は控えられている。一次的にはガーディアン紙とワシントン・ポスト紙、二次的にはニューヨーク・タイムズ紙やシュピーゲル誌等々のジャーナリストによる周到な職業人的配慮と分析が見事なまでに加えられていることが推察される。

言論人であれ、ジャーナリストであれ、『情報源の秘匿』を個々人が、あるいはメディアにかかわる企業組織等が死守できる技術的環境にないことは、何人も認めざるをえない今日である。むしろ、情報の出所を当然の前提として積極的に明示し、記事の正確性、信頼性、透明性を期すという、本来の原則が貫徹される以外に道はない時代となっている。

その原則を貫徹した上で、どのようにして、情報源を保護するか、特にその名誉と尊厳を守るかが大切な課題となっているのである。この新年の元旦にガーディアン紙が、スノーデン氏の恩赦を主張したことは、むしろ新しい情報の時代に必要な行動として実践されたものと考えられる。また、様々な情報源からもたらされるデータを、そのデータが膨大でビッグなものであれ、微細なものであれ、それを分析・解析し、統計的処理も含めた調査能力を発揮する必要性が高まっている。今日、この調査を個人、ないしは一つの組織によって実施することは困難な時代となっている。個々人の高いモチベーションを保ちつつ、地球的な規模の組織的連携プレーが必要なのである。スノーデン氏が齎<sup>もたら</sup>した情報を、そのままの形ではなく、精緻な調査分析を加えた上で、総合的な判断能力を働かせてのフィルターを通した情報を伝達してきたガーディアン紙をはじめとした各社の

今般の努力が、注目される所以でもある。

また、どのような組織であっても肥大化の傾向があり、その拡張に伴って官僚制のデメリットが増加する嫌いがあることは否めない。特に、情報にかかわる組織は、他者の監視は得意であっても、自らの組織そのものにチェック機能を働かせることは殆ど不可能で、至難<sup>(21)</sup>の業である。一国の立場からだけでなく、ユニバーサルな鳥瞰的視点から、情報やメディアのガバナンスを発揮させることが人間の賢さを発揮するために必須なのだ。

情報といえば、多少なりとも敵情報知 (renseignements sur les ennemis) を含意する諜報 (information et intelligence) 的なものとして考えざるを得ない時代もあった<sup>(22)</sup> (もともと、今もなお、あるのかも知れない)。チューリング博士の今回の恩赦の唯一の理由も第2次大戦中の暗号解読である。

しかしながら、情報といえば、本来は、福澤諭吉先生の説いたように、「聞見を博くして事物の有様を知ると云ふ意味」<sup>(23)</sup>に理解されるべきものであろう。ただし、その本来の意味における情報の流通を地球規模で可能にするためには、一国や一部の企業に依存する偏った情報通信インフラに頼りっきりという状況から脱却する必要がある。

その上で、国境や敵味方を超えた、情報にかかわるユニバーサルなシステムとして、本来の意味で「賢い機械 (Intelligent machines)」<sup>(24)</sup>と情報のネットワークを基盤とする、賢い情報の宇宙を構築していくことができれば素晴らしい。

## 注

脚注中のウェブ・サイト参照日時は別段の記載が無い限り、すべて2014年1月19日23:00JSTにおけるものである。

- (1) Royal pardon for WW2 code-breaker Dr Alan Turing, Ministry of Justice, 24 December 2013 in the sixty-second Year of Our Reign, Minister The Rt Hon Chris Grayling MP.  
<https://www.gov.uk/government/news/royal-pardon-for-ww2-code-breaker-dr-alan-turing>
- (2) Security services may have killed code-breaker Alan Turing for being gay claims campaigner Peter Tatchell-The code-breaker died in 1954 after eating a cyanide-laced apple. Mr Tatchell is urging the Government to investigate Turing's death. The campaigner said Turing's Royal pardon was wrong because some 50,000 other men were convicted under the same law By Alex Ward Published: 16:34 GMT, 29 December 2013  
<http://www.dailymail.co.uk/news/article-2530751/Security-services-killed-code-breaker-Alan-Turing-gay-claims-campaigner-Peter-Tatchell.html>  
cf. [http://www.nytimes.com/2013/12/24/world/europe/alan-turing-enigma-code-breaker-and-computer-pioneer-wins-royal-pardon.html?\\_r=0](http://www.nytimes.com/2013/12/24/world/europe/alan-turing-enigma-code-breaker-and-computer-pioneer-wins-royal-pardon.html?_r=0)
- (3) “bombe”と名付けられた機器も、その一つである。<http://www.telegraph.co.uk/history/world-war-two/10536246/Alan-Turing-granted-Royal-pardon-by-the-Queen.html>  
[http://worldnews.nbcnews.com/\\_news/2013/12/23/22025978-queen-pardons-computing-giant-alan-turing-59-years-after-his-suicide?lite](http://worldnews.nbcnews.com/_news/2013/12/23/22025978-queen-pardons-computing-giant-alan-turing-59-years-after-his-suicide?lite)
- (4) cf. George Dyson; Turing's Cathedral: The Origins of the Digital Universe, 432pp., Allen Lane, 1 Mar 2012 (原田三知世訳、チューリングの大聖堂—コンピュータの創造とデジタル世界の到来、648pp., 2013年2月、早川書房)

- (5) 24 December 2013 at 00:00 GMT, Royal pardon for codebreaker Alan Turing - The centenary of Turing's birth was marked in June 2012 Computer pioneer and codebreaker Alan Turing has been given a posthumous royal pardon.  
It overturns his 1952 conviction for homosexuality for which he was punished by being chemically castrated. <http://www.bbc.co.uk/news/technology-25495315>
- (6) Le Monde du 27 décembre 2013 p.3, La grâce d'Alan Turing, héros de la guerre et gay persécuté, Marc Roche (Londres, correspondant)
- (7) [http://abonnes.lemonde.fr/europe/article/2013/12/26/la-grace-d-alan-turing-heros-de-la-guerre-et-gay-persecrete\\_4340150\\_3214.html?xtmc=alan\\_turing\\_grace&xtrc=1](http://abonnes.lemonde.fr/europe/article/2013/12/26/la-grace-d-alan-turing-heros-de-la-guerre-et-gay-persecrete_4340150_3214.html?xtmc=alan_turing_grace&xtrc=1)
- (8) <http://www.theguardian.com/science/2013/dec/24/enigma-codebreaker-alan-turing-royal-pardon>
- (9) ① Iain Standen, chief executive of the Bletchley Park Trust, ② Dr Andrew Hodges, tutorial fellow in mathematics at Wadham College, Oxford, and author of the biography Alan Turing: The Enigma, ③ David Leavitt, professor of English at Florida University and author of The Man Who Knew Too Much: Alan Turing and the Invention of the Computer (2006), ④ Lord Sharkey, Liberal Democrat peer
- (10) cf. 19 April 2012 at 12:48 GMT, Alan Turing papers on code breaking released by GCHQ  
By Chris VallanceBBC News  
<http://www.bbc.co.uk/news/technology-16919012>
- (11) Le Monde du 24 décembre 2013 p.2, Derrière l'arbitraire de la grâce, le triomphe de Vladimir Poutine.
- (12) Le Monde du 24 décembre 2013 p.1, Khodorkovski- En Retrait des Affaires et de la Politique, et aussi p.2 & p.21- Les trois vies de Khodorkovski.
- (13) The Washington Post, Edward Snowden, after months of NSA revelations, says his mission's accomplished, Barton Gellman, December 24, 2013  
[http://www.washingtonpost.com/world/national-security/edward-snowden-after-months-of-nsa-revelations-says-his-missions-accomplished/2013/12/23/49fc36de-6c1c-11e3-a523-fe73f0ff6b8d\\_story.html](http://www.washingtonpost.com/world/national-security/edward-snowden-after-months-of-nsa-revelations-says-his-missions-accomplished/2013/12/23/49fc36de-6c1c-11e3-a523-fe73f0ff6b8d_story.html)  
Le Monde du 25 décembre 2013 p.2, Edward Snowden, l'ex-consultant de la NSA, dit avoir atteint son but
- (14) The guardian, Editorial; Snowden affair: the case for a pardon, Snowden gave classified information to journalists, even though he knew the likely consequences. That was an act of courage Wednesday 1 January 2014
- (15) The New York Times, Opinion Pages - Editorial; Edward Snowden, Whistle-Blower By The Editorial Board, Published: January 1, 2014, in print on January 2, 2014, on page A18 of the New York edition  
<http://www.nytimes.com/2014/01/02/opinion/edward-snowden-whistle-blower.html?ref=opinion&r=2&>
- (16) ベルギーのラ・リーブル紙の Stéphanie Fontenoy ニューヨーク特派員は、Alan Dershowitz 教授とのインタビュー記事を、2014年1月7日付で紹介している。同教授は、そこで、ニューヨーク・タイムズ紙は本件の受益者／当事者であることを明らかにしておらず、その論説はジャーナリズム倫理に反する (le "New York Times" viole l'éthique journalistique) とした上で、スノーデン氏への恩赦は、目的が手段を正当化するかのような、恐ろしい先例となる (accorder un pardon à M. Snowden établirait un terrible précédent) と批判している。ただし、ニューヨーク・タイムズ紙はスノーデン氏の恩赦に直接的に言及している訳ではない。これは、むしろ同特派員が、「ニューヨーク・タイムズ紙が恩赦を主張していることについて、どう考えるか (Que vous inspire cet appel à la clémence?)」と質問、これへの答えとしての表現をとっているからなのかも知れない。

*cf.* Affaire Snowden: “Le pardon serait un terrible précédent”

<http://www.lalibre.be/actu/international/affaire-snowden-le-pardon-serait-un-terrible-precedent-52cb84cb35701baedab29c8a>

- (17) Le Monde du 19 janvier 2014, p.1, ÉTATS-UNIS: PARDONNER À SNOWDEN?
- (18) Ibid. p.1, Éditorial - Encore un effort, monsieur Obama.
- (19) Ex-CIA director: Snowden should be ‘hanged’ if convicted for treason, Lucas Tomlinson, December 17, 2013, FoxNew  
<http://www.foxnews.com/politics/2013/12/17/ex-cia-director-snowden-should-be-hanged-if-convicted-for-treason/>
- (20) Le Nouvel Observateur du 17-01-2014, Obama limite les pouvoirs de la NSA, sans renoncer à la collecte de données  
<http://tempsreel.nouvelobs.com/topnews/20140117.AFP7845/obama-promet-la-fin-de-l-espionnage-des-dirigeants-allies.html>  
 Obama acknowledges Edward Snowden disclosures in NSA reform speech  
[http://www.theguardian.com/world/2014/jan/17/obama-acknowledges-edward-snowden-nsa-reform?google\\_editors\\_picks=true](http://www.theguardian.com/world/2014/jan/17/obama-acknowledges-edward-snowden-nsa-reform?google_editors_picks=true)
- (21) The New York Times, The Opinion Pages | Editorial, The President on Mass Surveillance January. 17, 2014  
[http://www.nytimes.com/2014/01/18/opinion/the-president-on-mass-surveillance.html?\\_r=0](http://www.nytimes.com/2014/01/18/opinion/the-president-on-mass-surveillance.html?_r=0)
- (22) *cf.* Jean-Pierre Guyard ; Instruction pour le service et les manœuvres de l'infanterie légère en campagne [une plaquette], 1804. (酒井忠恕譯：實地演習軌典、内外兵事新聞局、明治9年)  
*cf.* Le Monde du 17.01.2014, Martin Untersinger, Réforme de la NSA: les Etats-Unis promettent la fin des écoutes des dirigeants alliés.  
[http://abonnes.lemonde.fr/technologies/article/2014/01/17/les-etats-unis-vont-revoir-la-surveillance-telephonique-de-la-nsa\\_4350188\\_651865.html](http://abonnes.lemonde.fr/technologies/article/2014/01/17/les-etats-unis-vont-revoir-la-surveillance-telephonique-de-la-nsa_4350188_651865.html)  
*cf.* BBC, US spy leaks: How intelligence is gathered, 17 January 2014 at 10:01 GMT  
<http://www.bbc.co.uk/news/world-us-canada-24717495>
- (23) 「智とは必ずしも事物の理を考へて工夫するの義のみに非ず、聞見を博くして事物の有様を知ると云ふ意味にも取る可し。即ち英語にて云へばインフラルメーションの義に解して可ならん」  
 福澤諭吉：民情一新、明治12年、著者蔵版
- (24) “Let an ultraintelligent machine be defined as a machine that can far surpass all the intellectual activities of any man however clever. Since the design of machines is one of these intellectual activities, an ultraintelligent machine could design even better machines; there would then unquestionably be an ‘intelligence explosion,’ and the intelligence of man would be left far behind. Thus the first ultraintelligent machine is the last invention that man need ever make.”  
 Irving John Good; Speculations Concerning the First Ultraintelligent Machine, Trinity College, Oxford.  
<http://commonsenseatheism.com/wp-content/uploads/2011/02/Good-Speculations-Concerning-the-First-Ultraintelligent-Machine.pdf>